

滲出性中耳炎とその治療	1ページ
市民公開講座より「バランス食のすすめ」／医療福祉相談室だより／タケオの部屋⑤	2ページ
新任医師紹介／やまばとギャラリー／三重病院外来糖尿病教室のお知らせ	3ページ
アレルギー教室のクッキング／外来からのお知らせ／外来診察のご案内	4ページ

滲出性中耳炎とその治療

▶ 滲出性中耳炎とは？

鼓膜のその奥の中耳に液がたまる状態で、2歳から10歳くらいの子どもがよく発症します。

急性中耳炎の後にたまった液がそのまま残ってしまい慢性化したもので、治るまでに数か月かかったり、場合によっては何年もかかることがあります。

▶ どうして液がたまるの？

液が抜けにくいのは、耳の後ろの骨の中にある乳突蜂巣という蜂の巣状の空洞構造の部分と中耳と鼻の奥をつなぐ耳管という管がうまく機能していないことが関係しています。

乳突蜂巣は通常3～4歳ころまでに著しく発達するといわれていますが、急性中耳炎に長い間あるいは繰り返しかかると発育が悪くなって滲出性中耳炎が治りにくくなります。また、子どもは耳管の機能が未熟であり、慢性的な鼻の炎症があっても耳管のはたらきは悪くなり液が抜けにくくなります。

▶ 治療法にはどのようなものがあるの？

治療法には、外科的なもの、保存的なものがあります。

外科的な治療には、耳に溜まった液が耳管からのどへ流れていくように、鼓膜に小さな穴をあけそこに小さなチューブを入れる方法があります。が、この治療法は、穴が残る可能性があり、一般的にはまずは保存的な治療を行います。

保存的な治療には、鼻の治療、抗菌薬の投与や、耳管を通じて鼻の奥から中耳へ空気を送る耳管通気療法があります。耳管通気療法は、病院での頻回の処置を必要とし、また苦痛を伴うため小さいお子さんにはなかなか実施するのが難しかったのですが、最近では家庭でできる専用のゴム風船を使った自己通気療法が開発され、有効であることが報告されています。

(当院では、医師の指導のもと自己通気療法を行っています。)

滲出性中耳炎が就学時までまでに自然に治る割合は90%以上と考えられていますが、5%前後は難治化し、さらにその5%が後遺症を残すとされています。

言葉を覚える大切な時期に長期間滲出性中耳炎が続くと、聞こえがあいまいであるため言葉の遅れや発音の異常をきたすことがあります。また難治化すると、手術が必要となるような慢性の中耳炎を発症することもあります。

滲出性中耳炎は痛みもなく熱も出ないので、治療が長期化すると続ける必要があるのか疑問に思われる保護者の方がおられるかと思いますが、このようにしっかり治療することが必要となります。

(耳鼻咽喉科 臼井 智子)